

Ⅱ 野 菜

凡 例

は 種	○	
台 木 は 種	○	
採苗、さし木	□	
第1回移植	△	
第2回移植	△	
定 植	◎	
摘 果	×	
間 引 き	⊗	
摘 心	⊠	
収 穫		▭
トンネル (終)	Ω	(Ω)
ハウス (終)	⌢	(⌢)
マルチ (終)	✂	(✂)
二重被覆 (終)	Ω	(Ω)
暖 房 (終)	⌢	(⌢)
山上げ (終)	⌢	(⌢)
寒冷紗 (終)	⌢	(⌢)
接 ぎ 木	⊕	
キ ャ ッ プ	⌢	
交 配	♀	
植物調節剤処理	↓↓	
施 肥	●	

野菜の特性と環境保全型施肥技術

(1) 施肥に対する考え方

野菜は種類が極めて多く、作型、栽培条件によっても施肥量や施肥方法が異なる。基本的な肥培管理は、根の生育に好適な物理性、化学性、生物性を維持することであり、施肥は作物が必要とする養分を必要な時に、必要な量を供給することである。

従って、野菜の施肥は各種野菜の栄養生理特性を考慮し、養分吸収、肥料の利用効率（窒素30～40%、リン酸10%、カリ40～50%）、土壌条件などを考えて、施肥管理をする必要がある。

しかし、集約的な野菜生産を行っているほ場においては、欠乏症よりも、むしろ養分の集積に伴う過剰症の発生や、過剰施肥及び成分間のアンバランスにより発生する生理障害が増加している。また窒素等の肥料成分が農耕地から流出し、地下水を汚染する場合もみられることから、今後は環境への影響にも十分配慮した施肥管理が求められる。

生産性を損なうことなく環境への負荷も考慮した施肥管理を行うためには、まず、土壌診断を実施することで土壌中の養分状態を的確に把握し、養分の過剰な蓄積を監視する必要がある。そして、土壌の状態に応じた有機質資材及び土壌改良資材の投入によって地力を維持しつつ、不足する養分を作物の養分吸収パターンに合わせて適量施用し、収穫後の土壌に過剰な養分が残存しないように管理する。

(2) 養分吸収の特徴

ア 養分吸収量

主要野菜の養分吸収量を表1に示した。吸収量は野菜の種類によって大きく異なるが、カリが最も多く、次いで窒素、カルシウム、リン酸、マグネシウムである。

また、野菜の特徴として、カルシウムの欠乏は各種障害の発生原因となっている。

イ 養分吸収パターン

(ア) トマトなどの果菜類は、葉菜類や根菜類と異なり、栄養生長と生殖生長が、全生育期間をとおして同時に行われている。トマトを例に、その養分吸収経過を図1に示した。トマトで最も吸収量の多いのはカリである。窒素とカルシウム及びリン酸とマグネシウムはほぼ平行的に吸収され、いずれの成分も収穫終了時まで直線的に増加している。

(イ) 葉菜類は、収穫までの全生育期間はほとんど栄養生長の期間である。キャベツ、非結球メキャベツ（プチベール）を例にその養分吸収経過を図2、図3に示した。キャベツの養分吸収量は収穫時に向かって徐々に多くなり、収穫前の1～2カ月の間に全吸収量の80%程度に達する。非結球メキャベツ（プチベール）は腋芽形成時までに全吸収量の80%程度に達する。

(ウ) 根菜類は生育の中期に養分吸収のピークがあり、それ以後はもっぱら葉部から根部への養分の移行のため、吸収量は少なくなる。

ダイコン（図4）では、窒素、カリ、カルシウムは生育の中期から吸収が急速に増加し、その後緩慢になるが、カリが最も多い吸収量となっている。リン酸、マグ

ネシウムの吸収量はこれらの成分に比べ少ない。

(エ) 好適な土壌窒素量の推移

野菜のタイプ別の例を図5に示した。ホウレンソウとタマネギ、ハクサイは生育とともに無機態窒素は減少するが、キュウリとトマトでは生育中変動を伴いつつ、高く維持されている。

表 1 野菜の養分吸収量

野菜名	収量 (t/10a)	養分吸収量 (kg/10a)						N(100)に対する吸収比				備考
		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	MgO		P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	MgO	
果菜	トマト	9.3	25.6	6.7	47.3	20.5	4.6	26	185	80	18	旧東海近畿農試
	キュウリ	8.3	19.8	7.1	33.6	29.0	6.3	36	170	146	32	"
	スイカ	5.7	10.9	0.7	13.9	5.9	0.5	6	128	54	5	千葉農試(トンネル)
	ナス	5.0	16.4	4.2	25.5	6.1	2.3	26	155	37	14	旧東海近畿農試
	ピーマン	3.0	17.5	3.4	22.0	7.5	2.7	19	126	43	15	"
葉菜	イチゴ	6.0	20.1	9.2	28.7	12.3	7.5	46	143	61	37	栃木農試
	キャベツ	4.8	19.5	5.6	23.4	14.9	3.1	29	120	76	16	旧東海近畿農試
	非結球メキャベツ (ブチペール)	1.7	30.0	26.0	55.5	42.2	7.7	87	185	141	26	静岡農林研
	ハクサイ	5.6	23.6	8.0	26.3	12.6	2.8	34	111	53	12	旧東海近畿農試
	レタス	4.9	21.6	4.3	40.8	7.3	3.3	20	189	34	15	"
	タマネギ	4.6	8.9	3.5	12.4	5.4	1.5	39	139	61	17	"
	ネギ	3.3	14.3	5.5	20.9	12.7	4.6	38	146	89	32	茨城県農総センター
根菜	ホウレンソウ	1.8	10.1	3.4	8.3	-	-	34	82	-	-	山崎
	ダイコン	5.5	12.8	5.0	17.0	5.7	1.1	39	133	45	9	旧東海近畿農試
	ジャガイモ	3.4	10.5	5.3	15.0	-	-	50	143	-	-	山崎

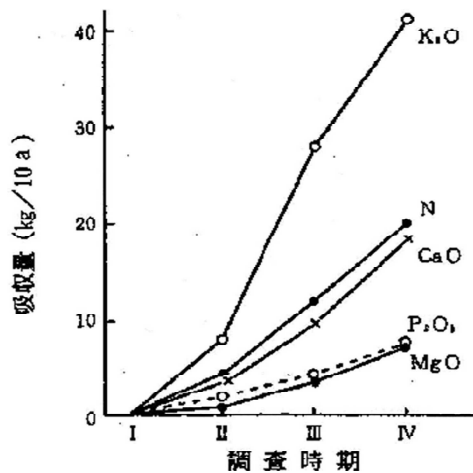


図1 トマトの養分吸収経過

(武井ら、1970)

I : 定植期、II : 第一花房着果期、
III : 第一花房着色期、IV : 全花房収穫終了期

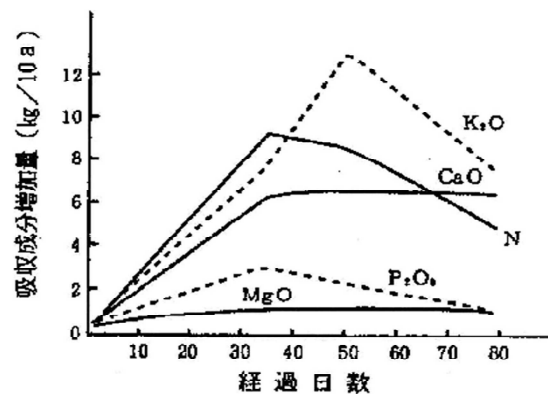


図2 キャベツの養分吸収経過

(東京農試)

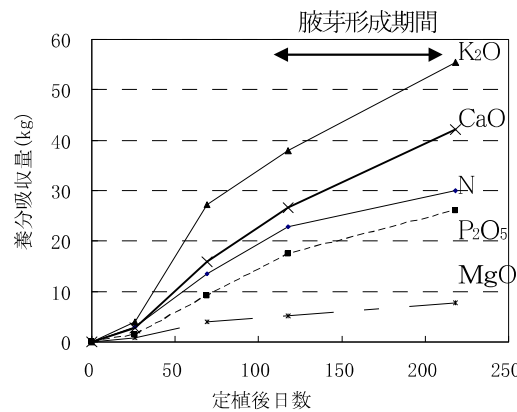


図3 プチパールの養分吸収経過
(静岡農林研)

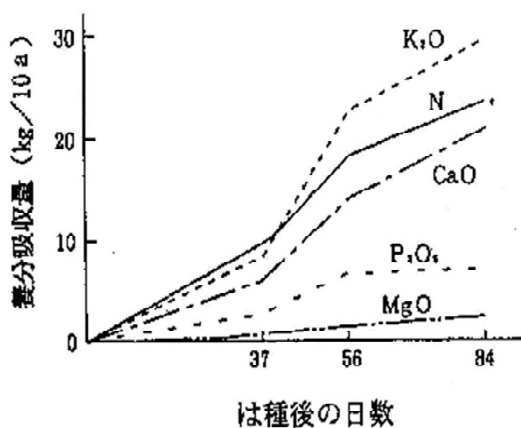


図4 ダイコンの時期別養分吸収
(鈴木ら、1964)

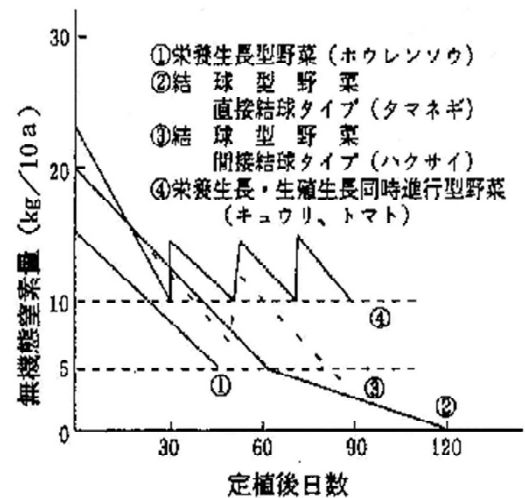


図5 野菜のタイプ別にみた望ましい土壌中の無機態窒素の推移(相馬、1988)

(3) 環境保全型施肥管理技術

ア 肥効調節型肥料

これまでの生産性を維持しつつ、環境への負荷軽減を達成するためには、土壌診断により土壌養分の状態を適切に把握し、作物の生育に不足している成分を、その吸収パターンに合わせて施用することが基本となる。しかし、従来多用されてきた速効性の化学肥料だけでは、様々な野菜の養分吸収パターンに合わせて施用することが非常に困難であり、吸収されずに残存した肥料成分は環境負荷の一因にもなっていた。

このような技術的問題を解決するために開発されたのが「肥効調節型肥料」である。肥効調節型肥料は、土壌中での肥料成分の溶出や形態変化を物理的あるいは化学的方法により制御し、作物の養分吸収パターンに対応した養分供給を可能とした。その結果、肥料効率が向上し施肥量が削減されるとともに、環境への肥料成分の溶出も抑制

される。また、全量元肥施用も可能になるなど省力化技術としても注目されている。

肥効調節型肥料には、被覆肥料、化学合成緩効性窒素肥料及び硝化成抑制材入り化成肥料の3種類がある。これらの肥料の特性を表2に示した。

表2 肥効調節型肥料の特性

種 類	分類・種類等	化学的構造、性状等	利用上の特色
1 被覆肥料 (コーティング肥料)	(樹脂系被覆肥料) ○熱可塑性樹脂 ・ポリエチレン ・ポリスチレン ○熱硬化性樹脂 ・アルキド ・アクリル ・ポリウレタン (無機系被覆肥料) ・硫黄	水溶性肥料を無機質の硫黄や微細な穴の空いた合成樹脂の膜で被覆し、肥料の溶出量や溶出期間を調節したもの。	粒径の大きさ、被覆材料の種類や膜厚のちがいに、かなりの程度まで作物の吸収に応じた溶出量や溶出期間を設計できるようになっている。 しかし、被覆肥料の溶出は地温、土壤水分量などにかなり左右される。 溶出パターンとして、①施肥直後から直線的に肥料成分の溶出が始まる「リニアタイプ型」、②施肥初期に溶出抑制期間があり、その後を開始する「シグモタイプ型」がある。
2 化学合成緩効性窒素肥料	・ウレアホルム ・CDU ・IB ・グアニル尿素 ・オキサミド	肥料そのものが水に難溶性であったり、微生物の分解を受けにくい性質の化合物で、尿素等の縮重合反応により製造される。	土壤中で加水分解反応や微生物分解をうけて肥料成分を有効化し、作物に吸収される。 分解の速さは肥料の粒の大きさにより調整出来る。分解の速さは温度、水分、微生物活性などの条件により異なる。
3 硝化成抑制材入り化成肥料	(硝化成抑制材の種類) ・AM ・Dd ・ST ・MBT ・ASU ・ATC ・DCS	土壤に吸収されず損失しやすい硝酸の生成を抑える硝酸化抑制剤を使用し、土壤中での硝酸化作用を抑制し、窒素肥料の利用効率を高めた肥料。	硝化抑制期間の持続期間は3～4週間をめぐりとしてつくられている。 根圏から流亡しやすく地下水等への悪影響が懸念される硝酸態窒素の生成を抑える効果や、脱窒活性を抑える効果で温室効果ガスの一種である一酸化窒素の放出量を削減する効果もあり、環境保全にも有意義である。

イ 局所施肥

近年、化学肥料投入量の削減など環境保全型の施肥管理を推進する動きが活発となり、局所施肥に基づいた施肥技術についても関心が寄せられている。

従来の全面全層施肥の場合、定植直後では根が十分に伸長していないことから、降雨により施肥成分が溶脱しやすい。そこで根圏局所に肥料を施用すれば、野菜に

よる肥料利用率が向上し、施肥量が削減できるため地下水への溶脱も抑制できることが、低栽植密度のダイコン等で認められている。ただし根圏への局所施肥では、濃度障害が発生しやすいため緩効性肥料を利用する。トマト抑制栽培において、肥効調節型肥料（被覆燐硝安加里）を鉢上げ時に育苗鉢内に層状施肥または混合施肥することによって慣行栽培と同等の収量が得られ、30～40%の施肥量が削減できたという試験事例も報告されている（中村ら、2006）。

ウ 混合堆肥複合肥料

平成24年に肥料の品質の確保等に関する法律が改正され、一定条件の堆肥と普通肥料を配合し、成形・加熱乾燥することで普通肥料の「混合堆肥複合肥料」として販売できるようになった（図6）。

【以前の肥料の品質の確保等に関する法律】



【新しい規格H24.9～】

【使用できる堆肥の条件】

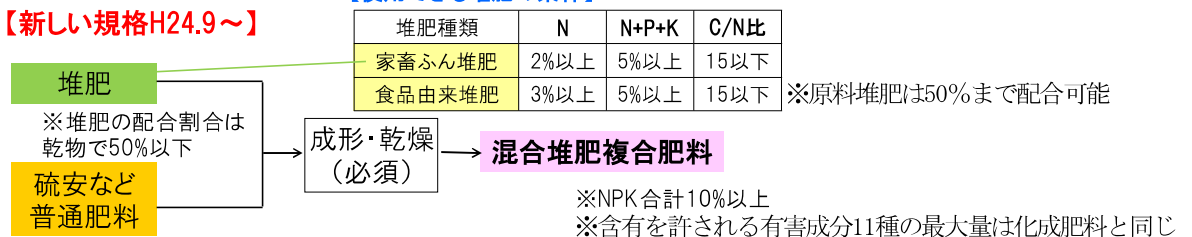


図6 混合堆肥複合肥料の公定規格

この肥料は堆肥を含んでいるため、有機物供給効果が特徴である。粒状またはペレット状に成形されているので化成肥料と同様に散布でき、水分が10%以下に調整されているので保管性も高い。

堆肥を散布する場合、施肥と合わせるとリン酸、カリ成分が過剰になることがあるが、混合堆肥複合肥料は成分保証されているため、適正施肥により土壤養分のバランスを維持しやすい。

農林技術研究所では、土づくり効果の高い牛ふん堆肥を配合した、混合堆肥複合肥料を開発した。チンゲンサイで行った試験では、混合堆肥複合肥料は有機配合肥料より跡地土壤のpHと腐植量を維持する傾向で、肥料成分の溶脱を抑える効果が期待できる環境に優しい肥料である。

（参考文献：混合堆肥複合肥料の製造とその利用、農林水産省委託プロジェクト有機質資材コンソーシアム編、
http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/133583.html）

エ マルチ栽培

プラスチックフィルム（生分解性を含む）等で土壤の表面を被覆して栽培する方法で、特に多雨条件下では肥料成分の溶脱に顕著な低減効果がある。特に、全面マ

マルチによる効果が高い。また、緩効性肥料の場合もマルチ栽培で肥料効率が上がり、施肥量削減が可能となる。

マルチ資材の特性は、資材によって大きく異なるので使用目的にあったものを選択する必要がある。

オ 灌水同時施肥(養液土耕)栽培

灌水同時施肥栽培（一般に養液土耕栽培といわれる）とは、培地として土を使う土耕栽培であるが、作物の生育に必要な最小限の水と肥料（液肥）を少量ずつ何回にも分けて点滴状態で施用する栽培方法で、トマトやイチゴ等の施設栽培を中心に普及している。

（１）特長

ア 従来の栽培法では元肥と追肥を中心にした施肥と短時間に多量の灌水を行うため、肥料の流亡による環境汚染の可能性があるが、灌水同時施肥栽培では毎日必要量だけの水と肥料を与えるだけなので、環境への悪影響の心配もなく節水と施肥コストの削減もできる。

イ 従来の散水チューブと異なり、均一に少量を点滴するノズルを持った専用の点滴チューブを使うため、水と液肥の浸潤が作物の根圏域に限定される。このため、作物の生育が制御しやすい。

ウ 作物の生育ステージにみあった養水分管理をするため、施肥量は従来よりも大幅に削減でき、栽培終了時の土壌中の残存肥料は非常に少ない。

（２）システム

各メーカーから数種類のシステムが販売されているが、基本的には原水ポンプ、水圧調整弁、コントローラー、液肥混入機、点滴チューブ等で構成され、ほとんどの機種はタイマー等と組み合わせて自動化されている（図6参照）。また、使用する液肥も作物や土壌に合わせた専用の複合肥料が市販されている。

（３）栽培上の留意点

栽培を始める前に土壌分析を行い、肥料の過不足を把握してから施肥設計を立てる。メーカーによってはユーザーの栽培予定土壌と作物に合わせたマニュアルを出しているところもあるので参考にすると良い。基本的には土壌に不足する成分を補い、過剰な成分を削減する。

（４）リアルタイム診断

作物の栄養状態と土壌溶液の成分を定期的に簡易分析したり、土壌のEC値を参考にすると過不足のない施肥ができる。

灌水水同時施肥のシステムは自動化されているものが多いが、作物の生育状況や天候に応じて、施肥量・灌水量を調節する。また、土壌条件が異なると作物によって同じ施肥設計では対応できない、システムが高価である等の問題点もある。

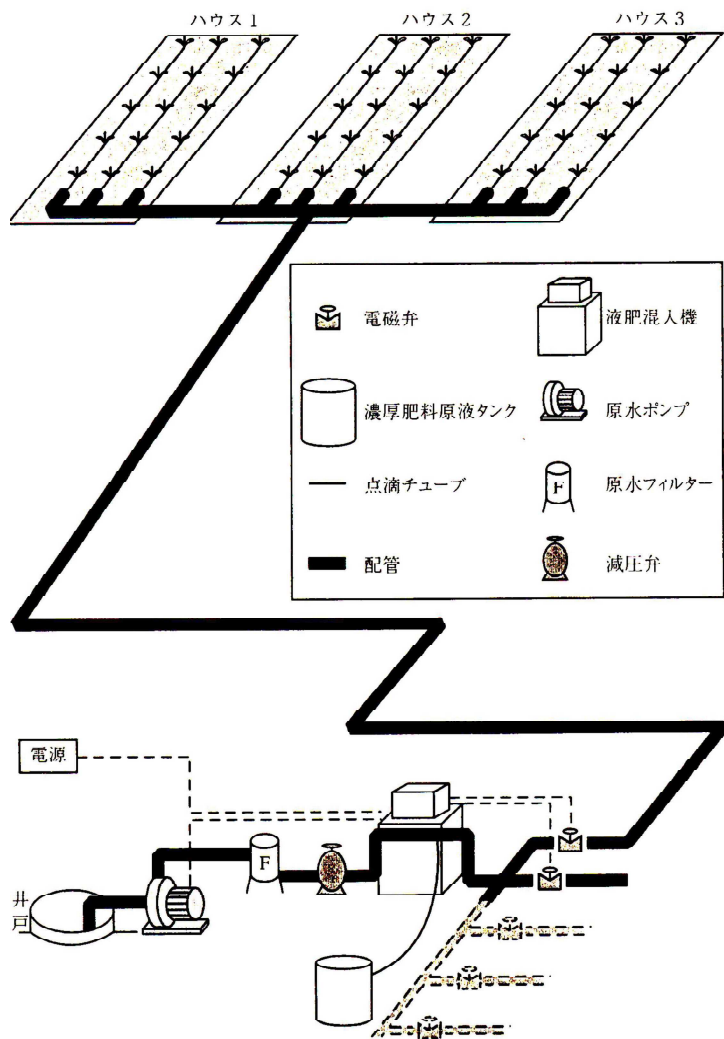


図7 養液土耕栽培システムの概略と使用機材
 (「養液土耕栽培の理論と実際」青木、梅津、小野[編]より抜粋)

1 果 菜 類

(1) トマト I (促成、志太)

1. 対象地域 志太
2. 土 壌 壤質土（褐色低地土、灰色低地土）
3. 栽植本数 2,300 本（一本仕立て）／10 a
4. 目標収量 10,000kg／10a
5. 栽培型と主な作業

月旬	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
促 成												(穂木) 桃太郎ホープ
主 要 作 業 名	台木は種、穂木は種	鉢上げ 接ぎ木	元肥 定植、暖房	二重被覆	収穫始め、追肥	追肥		摘心 二重被覆終わり	暖房終わり		収穫終わり	(台木) ドクターK

6. 施肥基準 (kg／10a)

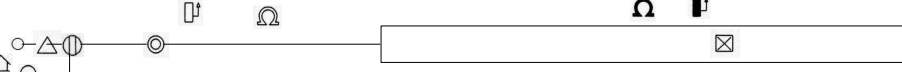
施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	定植 10 日前まで	21.0	21.6	20.0	3,000	有機配合
追 肥	1 2 月下旬	1.5	1.8	4.0		有機配合
	1 月下旬	1.5	1.8	4.0		有機配合
計		24.0	25.2	28.0	3,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 4段花房が開花し2段の果実肥大期は、異常茎になりそうな草勢の強い状態から、肥料不足になりやすい時期であるので、追肥のタイミングが遅れないよう注意する。

(2) トマトⅡ(越冬長期、田方・小笠)

1. 対象地域 田方、小笠
2. 土 壤 砂質～粘質土(砂丘未熟土、黒ボク土、灰色低地土)
3. 栽植本数 1,440 本/10a
4. 目標収量 15,000kg /10a
5. 栽培型と主な作業

月旬	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	品 種																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							
栽培型																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
促 成												(穂木) 桃太郎ホープ 桃太郎ヨーク																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
主 要 作 業 名		● 元 定 肥 植	● 追肥、 暖房	● 追肥	● 二重被 覆	● 追肥	● 収穫始 め、追 肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥、 二重被 覆終わ り	● 追肥、 暖房終 わり	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥</

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期			N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
壤質 ～ 粘質土	元 肥	7月下旬	20.0	26.0	22.0	2,000	緩効性肥料入有機配合
	追 肥	9月～4月 各下旬	2.0×8	2.0×8	2.0×8		
計			36.0	42.0	38.0	2,000	

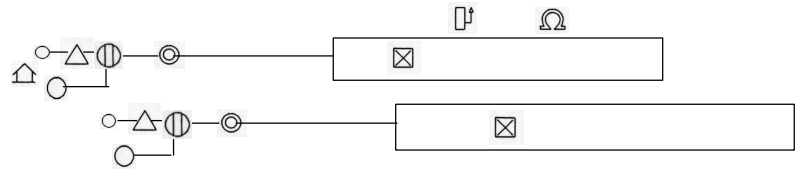
砂質土	元 肥	定植10 日前まで	9. 8	10. 6	9. 8	2, 000	緩効性 配合 液肥 液肥
	追 肥	9月中旬～11 月上旬	3. 0×4	2. 4×4	3. 6×4		
		11 月下旬～2 月中旬	1. 5×6	1. 5×6	3. 0×6		
		2 月下旬～4 月中旬	1. 5×6	0. 6×6	1. 1×6		
計			39. 8	32. 8	48. 8	2, 000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分(窒素、リン酸、カリ)に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 追肥開始は、1本仕立ては3段花房の開花期頃、2本仕立ては1段の果実が500円硬貨大の頃とするが、草勢が強い場合は樹勢の様子をみて施肥する。
- (4) 桃太郎ファイトでは、堆肥以外の全成分を10%少ない施肥量とする。

(3) トマトⅢ(抑制、三保)

1. 対象地域 三保
2. 土 壌 砂質土(褐色低地土)
3. 栽植本数 1,800 本/10 a
4. 目標収量 8,000kg /10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	6	7	8	9	10	11	12	1	2	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
抑制栽培										桃太郎ピース
主要作業名	台木は種、 穂木は種	接ぎ木 ● 元肥 定植	● 追肥 ● 追肥	● 追肥 ● 収穫始め ● 追肥	● 摘心、追肥 ● 暖房、追肥	● 追肥 ● 追肥、二重被覆	● 追肥 収穫終わり			

6. 施肥基準 (kg/10a)

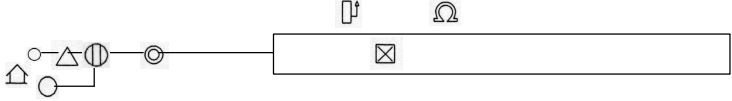
施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	定植 10 日前まで				2,000	有機配合 (イエバエ対策肥料)
追 肥	定植後 14 日以降 10～15 日間隔に 9 回施用	2.4	3.0	2.4		
計		21.6	27.0	21.6	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分(窒素、リン酸、カリ)に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 砂質地帯では有機質肥料が主体となるので、亜硝酸ガスによる障害を起こさないように、施肥方法、土壌、pH、換気などに注意する。

(4) トマトⅣ (抑制、志太・中遠・西部)

1. 対象地域 志太、中遠、西部
2. 土 壤 砂質～粘質土(砂丘未熟土、灰色低地土、グライ土)
3. 栽植本数 2,000 本/10 a
4. 目標収量 7,000 kg/10a
5. 栽培型と主な作業

月旬	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
抑制栽培											(穂木) 桃太郎コーク 桃太郎ホープ
主要作業名		台木は種、穂木は種	接ぎ木 台木鉢上げ	● 元肥 定植	● 追肥 ● 追肥 収穫始め	● 追肥 ● 追肥、摘心 暖房	二重被覆			収穫終わり	カネりん (台木) がんばん根3号 ベスバ がんばん根11号

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	定植 10 日前まで	8.0	10.0	8.0	2,000	有機配合
追 肥	9 月上旬	2.8	3.5	2.8		有機配合
	9 月中旬	2.8	3.5	2.8		有機配合
	10 月中旬	2.8	3.5	2.8		有機配合
	10 月下旬	2.8	3.5	2.8		有機配合
計		19.2	24.0	19.2	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部Ⅴ5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部Ⅴ6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 追肥開始は、3段花房開花期頃とするが、草勢が強い場合は樹勢の様子をみて施肥する。
- (4) 桃太郎ファイトでは、堆肥以外の全成分を10%少ない施肥量とする。

(5) トマトⅤ (ミニトマト、中玉トマト)

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 砂質～粘質土(砂丘未熟土、黒ボク土、褐色低地土、灰色低地土)
3. 栽植本数 1,440～2,000 本/10a
4. 目標収量 10,000 kg/10a
5. 栽培型と主な作業

月旬	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
促成長期	△ ○	△ ○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(ミニトマト) TY千果
主要作業名	● 穂木は種、 接ぎ木、元肥 台木鉢上げ 種、台木は種	● 定植	● 追肥、 暖房、 収穫始め	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥	サマー千果 小鈴クイーン (中玉トマト) レッドオーレ フルディカ

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期			N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
壤質 ～ 粘質土	元 肥	7月下旬まで	20.0	26.0	22.0	2,000	緩効性肥料入有機配合
	追 肥	9月～4月 各下旬	2.0×8	2.0×8	2.0×8		
計			36.0	42.0	38.0	2,000	

砂質土	元 肥	定植10日前まで	9.8	10.6	9.8	2,000	緩効性 配合 液肥 液肥
	追 肥	9月中旬～11月上旬	3.0×4	2.4×4	3.6×4		
		11月下旬～2月中旬	1.5×6	1.5×6	3.0×6		
		2月下旬～4月中旬	1.5×6	0.6×6	1.1×6		
計			39.8	32.8	48.8	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部Ⅴ5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部Ⅴ6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 追肥開始は、1本仕立ては3段花房開花期頃、2本仕立ては1段の果実が500円硬貨大の頃とするが、草勢が強い場合は樹勢の様子をみて施肥する。

(6) ナ ス I (早 熟)

1. 対象地域 県下一円（沼津、静岡）
2. 土 壤 壤質～粘質土（黒ボク土、灰色低地土）
3. 栽植本数 900 ～1,500 本／10 a
4. 目標収量 5,000 kg／10a
5. 栽培型と主な作業

月旬	12	1	2	3	4	5	6	7	8	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
トンネル早熟	○	△	△	●	●	●	●	●	●	(穂木) 千両2号 黒陽 (台木) アカナス トルバム カレヘン
主要作業名	台木は種 穂木は種	台木鉢上げ 穂木移植	接ぎ木	元肥 トンネルマルチ 定植	追肥	収穫始め、追肥 トンネル除去	追肥 マルチ除去、土寄せ	追肥	収穫終わり	

6. 施肥基準 (kg／10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	定植 10 日前まで	14.0	14.0	14.0	3,000	緩効性
追 肥	4月中旬	3.0	1.0	3.0		化成
	5月中旬	3.0	1.0	3.0		化成
	6月上中旬	3.0	1.0	3.0		化成
	7月上中旬	3.0	1.0	3.0		化成
計		26.0	18.0	26.0	3,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施用量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 台木‘トルバム・ビガー’や‘カレヘン’は、高温期には草勢が強いので、前作の養分残量を考慮し、元肥を施用する。

(7) ナスⅡ（促成）

- | | |
|-------------|-------------------|
| 1. 対象地域 | 三島、函南、浜松 |
| 2. 土 壌 | 壤質土（黒ボク土、灰色低地土） |
| 3. 栽植本数 | 900 ～1,200 本／10 a |
| 4. 目標収量 | 16,000kg／10a |
| 5. 栽培型と主な作業 | |

[illegible]

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	定植 10 日 前まで	44.0	48.0	34.0	5,000	緩効性
追 肥	10 月 16 日 (1 回) (8 月 1 回)	1.0	0.5	1.0		
計		52.0	52.0	42.0	5,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 連作により肥料養分の蓄積が進むので、土壌診断等により残存養分を把握した上で元肥施用量を決める。
- (4) 台木‘トルバム・ビガー’や‘カレヘン’は、高温期には草勢が強い一方、低温期の生育はアカナスより劣る傾向があるため低温期の肥料切れに注意する。

(8) シ シ ト ウ (早 熟)

1. 対象地域 静岡市南部
2. 土 壌 砂質土（褐色低地土）
3. 栽植本数 600 ～800 本／10 a
4. 目標収量 3,000 kg／10a
5. 栽培型と主な作業

月旬	2	3	4	5	6	7	8	9	10	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
										万願寺
主要作業名	は種 鉢上げ	元肥	定植 四本仕立て ひも誘引	追肥	収穫始め、 追肥	追肥	追肥	追肥	追肥	追肥
									追肥	収穫 終わり

6. 施肥基準 (kg／10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	定植 10 日 前まで	15.0	15.0	15.0	2,000	有機配合 (イエバエ対策肥料)
追 肥	2週間間隔 (1回当り) で10回	2.0	2.0	2.0		有機配合 (イエバエ対策肥料)
計		35.0	35.0	35.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。

(9) キ ュ ウ リ (促 成)

- | | |
|-------------|---------------------|
| 1. 対象地域 | 県下一円 |
| 2. 土 壌 | 砂質土（褐色低地土） |
| 3. 栽植本数 | 1,600 ～1,800 本／10 a |
| 4. 目標収量 | 10,000kg／10 a |
| 5. 栽培型と主な作業 | |

栽培型	月旬		11		12		1		2		3		4		5		6		品 種
			上	中 下	上	中 下	上	中 下	上	中 下	上	中 下	上	中 下	上	中 下	上	中 下	
促成																			(穂木) ニーナ ニーナZ
主要作業名					●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			(台木) ゆうゆう一輝 RK-3
	穂木は種、台木は種		接ぎ木		定植		追肥 摘心、追肥		追肥		追肥		追肥		追肥		追肥		収穫終わり

6. 施肥基準 (kg/10a)

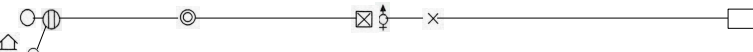
施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
追 肥	定植後 5 日 (1 回当り)				2, 000	有機配合
	(1 鉢から 5 鉢 1 回の割合で)	1 ～ 2 回目	1 ～ 2 回目	1 ～ 2 回目		
	鉢の 10 日隔	1. 6 × 2	2. 0 × 2	1. 6 × 2		
	に 11 回隔	3 回目～	3 回目～	3 回目～		
計		32. 0	40. 0	32. 0	2, 000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5（3）を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 砂質土地帯では有機質肥料が主体となるので、亜硝酸ガスによる障害を起こさないように、施肥方法、土壌、pH、換気などに注意する。

(10) 温 室 メ ロ ン

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 粘質～強粘質土（褐色低地土、灰色低地土）
3. 栽植本数 2,400 本／10 a
4. 目標収量 3,600 kg／10a
5. 栽培型と主な作業

播種後 日数	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	品 種
栽培型												アールスフェ ポリット
主要作業名	催芽 穂木は種、 台木は種 接ぎ木 蒸気消毒 ● 元肥施肥、 床作り ● 定植 ● 第1回追肥 結果枝の選定 摘心、交配 ● 第2回追肥 選果、玉つり ネット始め ネット終了 収穫											

6. 施肥基準 (kg／10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	床作り時	6.0	6.0	6.0		有機配合
追 肥	定植後 7 日	4.0	4.0	4.0		有機配合
	交配後 3 日	4.0	4.0	4.0		有機配合
計		14.0	14.0	14.0		

7. 施用上の留意事項

メロンはカリウム、カルシウム、マグネシウムなど陽イオンのバランスを土壌診断等で把握して、改善する。

(11) ハ ウ ス メ ロ ン

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壤 砂質～粘質土(砂丘未熟土、黄色土、灰色低地土)
3. 栽植本数 2,100 本/10a
4. 目標収量 3,100 kg/10a
5. 栽培型と主な作業

月旬	1	2	3	4	5	6	7	8	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
春作									アールスメロン
夏作									
主要作業名									
	(春作)	●							
	催芽 は種 鉢上げ 元肥 定植			交配	選果、 玉つり	収穫			

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	定植 10 日 前まで	12.0	10.0	6.0	2,000	有機配合
計		12.0	10.0	6.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照
- (3) 前作がある場合は、元肥施用量を削減する。

(12) スイカ I (ハウス)

1. 対象地域 箱根山麓
2. 土 壌 壤質土 (黒ボク土)
3. 栽植本数 500 本/10 a
4. 目標収量 5,000kg/10 a

5. 栽培型と主な作業

月旬	1	2	3	4	5	6	7	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
ハウス 半促成								(穂木) 春のだんらん (台木)
主要作業名	● 接ぎ木 元肥、トンネル、マルチ 台木は種、穂木は種	定植		● 交配 追肥		収穫始め	収穫終わり	つわもの ベスト冬瓜2号

6. 施肥基準 (kg/10a)

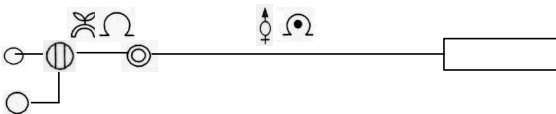
施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	定植 10 日前 まで	3.0	18.0	9.0	2,000	有機配合 熔リン又は重焼リン
追 肥	着果後 10 日	2.0		2.0		化成
計		5.0	18.0	11.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5 (3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 窒素肥料のむら効きが品質低下を招くので、常に平均して肥効が持続するようにする。

(13) スイカⅡ（トンネル、西部）

1. 対象地域 西部洪積台地、遠州灘海岸
2. 土 壌 粘質土（黄色土）砂質土（砂丘未熟土）
3. 栽植本数 270～400 本／10 a
4. 目標収量 4,000kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	2	3	4	5	6	7	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
トンネル							姫まくら 祭りばやし
主要作業名	元肥、接ぎ木 台木は種、穂木は種	● マルチ、トンネル 定植	● 追肥 交配	● 追肥、トンネル除去	収穫始め	収穫終わり	

6. 施肥基準（kg／10a）

施肥時期			N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
粘質土	元肥	トンネル作り前	6.0	18.0	10.0	2,000	有機配合、緩効性
	追肥	定植後 40 日	2.0		2.0		化成
計			8.0	18.0	12.0	2,000	

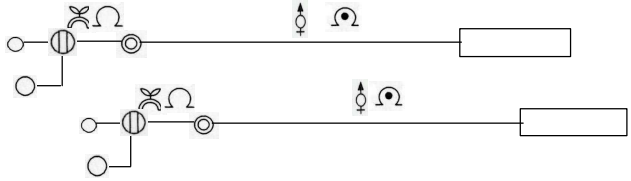
施肥時期			N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
砂質土	元肥	トンネル作り前	14.0	18.0	10.0	2,000	有機配合、緩効性
	追肥	定植後 20 日	5.0	3.0	5.0		有機配合又は化成
		定植後 40 日	3.0		3.0		化成
	計			22.0	21.0	18.0	2,000

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5（3）を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 窒素肥料の効きのむらが品質低下を招くので、平均して肥効が持続するようにする。

(14) スイカⅢ（トンネル、箱根山麓）

1. 対象地域 箱根山麓
2. 土 壌 壤質土（黒ボク土）
3. 栽植本数 600 本／10 a
4. 目標収量 6,000kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	1	2	3	4	5	6	7	8	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
トンネル									(穂木) 祭りばやしRG 祭りばやし11 春のだんらん (台木)
主要作業名	台木は種、穂木は種	● 接ぎ木 元肥、定植、マルチ			● 交配	● 追肥、トンネル除去		収穫始め	収穫終わり

6. 施肥基準 (kg／10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	定植 10 日前まで	3.0	18.0	9.0	2,000	有機配合 熔りん又は重焼りん
追 肥	着果後 10 日	2.0		2.0		化成
	着果後 25 日	2.0		2.0		化成
計		7.0	18.0	13.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5（3）を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 窒素肥料のむら効きが品質低下を招くので、常に平均して肥効が持続するようにする。

(15) カボチャ

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 砂質～粘質土（砂丘未熟土、灰色低地土）
3. 栽植本数 550～660 本（一本仕立て）／10 a
4. 目標収量 2,500kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	1	2	3	4	5	6	7	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
ハウス 半促成								メルヘン 坊ちゃん えびす みやこ
トンネル 早熟								
主 要 作 業 名			●	●	●			
		は 鉢 種 上げ (トンネル早熟)	元 マ 定 肥 ル 植 チ、 トンネル	追 交 肥 配	追 ト 肥 ネル 除 去	収 穫 始 め		

6. 施肥基準 (kg／10a)

施肥時期			N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
壤・粘質土	元 肥	定植 10 日前まで	12. 0	20. 0	12. 0	2, 000	有機配合、化成
	追 肥	つるもどし後	4. 0	2. 5	3. 5		化成
		1 番果着果後	4. 0	2. 5	3. 5		化成
計			20. 0	25. 0	19. 0	2, 000	

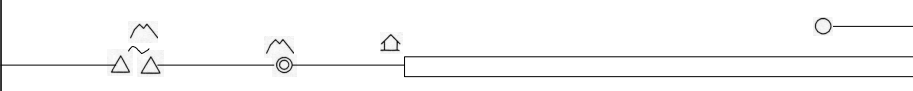
施肥時期			N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
砂質土	元 肥	定植 10 日前まで	18. 0	25. 0	21. 0	2, 000	有機配合、化成
	追 肥	つるもどし後	5. 0	3. 0	4. 0		化成
		1 番果着果後	5. 0	3. 0	4. 0		化成
計			28. 0	31. 0	29. 0	2, 000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5 (3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。

(16) イチゴ I (石垣)

1. 対象地域 久能～駒越
2. 土 壌 砂質土 (褐色低地土)
3. 栽植本数 7,000～10,000 本/10 a
4. 目標収量 4,000kg/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
石垣促成													紅ほっぺ きらび香
主要作業名		苗床準備 苗採り移植 山上げ (高冷地育苗)	● 石垣積替え・元肥	山下げ・定植		ビニール被覆 ● 保温開始、収穫始め			● 追肥		専用親株定植	収穫終わり	

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	8月中旬 (石垣積替え時)	23.0	23.0	23.0	2,000	緩効性肥料入り有機配合 (イエバエ対策肥料)
追肥Ⅰ	11月中旬	3.5	3.5	3.5		有機配合又は液肥
追肥Ⅱ	2月中旬	3.5	3.5	3.5		有機配合又は液肥
計		30.0	30.0	30.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5 (3) を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 「きらび香」は多肥条件下で頂部軟質果の発生がみられるため、「紅ほっぺ」より施肥量をやや少なめとし、(1)、(2) については特に留意する。
- (4) チップバーンやがく枯れの発生を防ぐため、窒素過剰にならないよう留意する。
- (5) 良質苗定植や光合成作用の促進、着果負担の軽減により根の活性を維持する。

(17) イチゴⅡ（促成）

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 砂質～粘質土(砂丘未熟土、多湿黒ボク土、灰色低地土)
3. 栽植本数 7,000 本／10 a
4. 目標収量 4,500kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
促成													紅ほっぺ
													きらび香
主要作業名	ポット受け	ランナー切り離し		● 定植	ビニール被覆	ポリマルチング（畝表面のみ）	● 追肥（マルチを通路までおろす）、暖房				二重被覆終り	専用親株定植、本ば暖房終り	収穫終わり

6. 施肥基準 (kg／10a)

施肥時期			N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
壤質 ～ 粘質 土	元 肥	定植10日前まで	20.4	24.0	20.4	2,000	緩効性肥料入有機配合
	追 肥	11月中旬	3.0	4.2	3.0		緩効性肥料又は液肥等
	計		23.4	28.2	23.4	2,000	

砂質土	元 肥	定植10日前まで	30.0	30.0	30.0	2,000	緩効性肥料入有機配合
	追 肥	12月下旬	2.0	1.0	2.0		緩効性肥料又は液肥等
	追 肥	2月下旬	2.0	1.0	2.0		
計			34.0	32.0	32.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 「きらび香」は多肥条件下で頂部軟質果の発生がみられるため、「紅ほっぺ」より施肥量をやや少なめとし、(1)、(2)については特に留意する。
- (4) チップバーンやがく枯れの発生を防ぐため、窒素過剰にならないよう留意する。
- (5) 良質苗定植や光合成作用の促進、着果負担の軽減により根の活性を維持する。

(18) エ ダ マ メ

1. 対象地域 清水（三保、駒越）
2. 土 壤 砂質土（褐色低地土）
3. 栽植本数 40,000～45,000 本／10 a
4. 目標収量 1,000kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	11	12	1	2	3	4	5	6	7	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
ガラス室	○	○		□	○	○		□	○	サヤムスメ サッポロミドリ
ビニール ハウス			○	○		□	○	○		
石垣付 用ハウス							○	○		
主要 作業名	● は 元 定 種 肥 植		● 追 肥	収 穫						

6. 施肥基準 (kg／10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施 肥 例
元 肥	定 植 前	4.0	4.0	3.0	有機配合又は化成
追 肥	開 花 前	6.0	8.0	9.0	有機配合（イエバエ対策肥料）
計		10.0	12.0	12.0	

7. 施用上の留意事項

砂質土地帯では有機質肥料が主体となるので、亜硝酸ガスによる障害をおこさないように、施肥方法、土壌、pH、換気などに注意する。

(19) エンドウ I (キヌサヤエンドウ)

1. 対象地域 伊豆 (賀茂)
2. 土 壌 壤質土 (黒ボク土)
3. 栽植本数 33,000～40,000 本/10 a
4. 目標収量 800kg/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬 栽培型	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	品 種
秋どり		○											伊豆1号
春どり					○								仁村赤花系
春どり ハウス				○									伊豆みどり
主 要 作 業 名	●		●	●	●								
	元 肥	は 種	追 肥	追 肥	追 肥								

6. 施肥基準 (kg/10a)

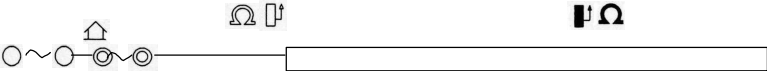
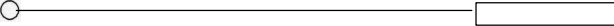
施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施 肥 例
元 肥	は種前	16.0	30.0	16.0	有機配合又は化成 化成
追 肥	9月中旬	3.0	3.0	1.9	
	10月中旬	3.0	3.0	1.9	
	11月中旬	3.0	3.0	1.9	
計		25.0	39.0	21.7	

7. 施用上の留意事項

- (1) サヤエンドウの養分吸収量は、収量1t/10aとして、窒素16kg、りん酸6kg、カリ12kg程度である。
- (2) 生育初期からの徒長を抑えるとともに、収穫期の肥料切れを防ぎ、収穫が終了するまで草勢を維持する。
- (3) 春どり・春どりハウスの3月の追肥は、草勢を見ながら施用する。

(20) エンドウⅡ（砂糖エンドウ）

1. 対象地域 西部（湖西、浜松）
2. 土 壌 壤質土～粘質土（赤色土、黄色土）
3. 栽植本数 9,000 本／10 a
4. 目標収量 2,400kg（露地 1,000 kg）／10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	9		10		11		12		1		2		3		4		5		品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
ハウス 加温																			鈴成砂糖えんどう
ハウス 無加温																			
露地																			
主要作業名	(ハウス加温)	●				●		●											
		は種 (ハウス加温)	元肥 定植		二重被覆	暖房 収穫始め	追肥		二重被覆、 暖房終わり	追肥								収穫終わり	

6. 施肥基準（kg／10a）

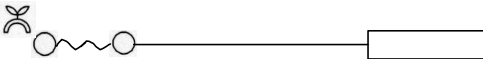
施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施 肥 例
元 肥	定植前	12.0	12.0	12.0	緩効性
追 肥	1月下旬	3.5	2.0	3.0	化成
	3月下旬	3.5	2.0	3.0	化成
計		19.0	16.0	18.0	

7. 施用上の留意事項

生育初期からの徒長を抑えるとともに、収穫期の肥料切れを防ぎ、収穫が終了するまで草勢を維持する。

(21) ス イ ー ト コ ー ン

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 砂質～粘質土（砂丘未熟土、黒ボク土、灰色低地土）
3. 栽植本数 3,300～4,000 本／10 a
4. 目標収量 1,200kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	月 旬	2			3			4			5			6			7			8			品 種	
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
トンネルマルチ栽培																						甘々娘 ゴールドラッシュ		
普通栽培																								
主要作業名	●						●																	
	元肥、 は種（トンネル）						元肥、 は種（普通）						収穫始め （トンネル）						収穫始め （普通）					

6. 施肥基準 (kg／10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施 肥 例
元 肥	は 種 前	26.0	24.0	21.0	2,000	緩効性
計		26.0	24.0	21.0	2,000	

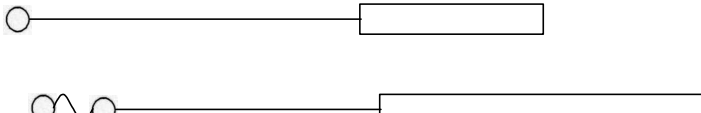
7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5（3）を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 生育初期に肥料濃度障害を起こしやすいので、前作がある場合は、土壌診断結果等に基づき、元肥の窒素とカリの施用量（成分量）は、10 a 当たり 10～20 kg とし、雄穂抽出期や絹糸抽出期に追肥を行う。

2 葉 茎 菜 類

(1) ハ ク サ イ

1. 対象地域 三島、駿東（箱根山麓）
2. 土 壤 壤質土（黒ボク土）
3. 栽植本数 3,500 ～4,000 本／10 a
4. 目標収量 10,000kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	8	9	10	11	12	1	2	3	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
秋まき 栽 培									緑雲 聖徳 大福
主要作業名	● 耕起・整地	● 元肥 は種	● 間引き・追肥	● 間引き・補植		● 追肥			
					● 結束始め	● 結束終わり	● 収穫		

6. 施肥基準 (kg／10 a)

施肥時期	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	B ₂ O ₃	堆肥	施肥例
元 肥 播種前	8.0	12.0	10.0	0.3	2,000	化成又は有機配合
追 肥 9月中下旬	6.0	5.0	5.0			化成
10月中下旬	4.0	3.0	3.0			化成
計	18.0	20.0	18.0	0.3	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分(窒素、リン酸、カリ)に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5(3)を参照。
- (2) 吸肥力が弱いので、土づくりを行い、根を深く張らせる。
- (3) 酸性土壌では石灰質肥料を施し、pH6.5程度に矯正する。
- (4) ホウ素欠乏対策にはホウ砂などを施す。

(2) キャベツ I (夏播き)

1. 対象地域 富士、富士宮、浜松、湖西
2. 土 壤 粘質～壤質土 (黄色土、黒ボク土)
3. 栽植本数 4,700 ～5,500 本/10 a
4. 目標収量 4,500 ～5,000kg /10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬 栽培型	7 上中下	8 上中下	9 上中下	10 上中下	11 上中下	12 上中下	1 上中下	2 上中下	3 上中下	4 上中下	品 種
12～1月 どり		○	●								金春 金系201号
1～4月 どり		○	●								豊光 YR錦秋152 如春
主要作業名	播種床準備	は種 ● 定植準備・元肥	追肥 ●	追肥 ●	追肥 ●	追肥 ● 一～四月どり追肥				収穫 ● 収穫終わり	おきな とくみつ

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥 定 植 前	16.0	16.0	16.0	2,000	化成
追 肥 10 月下旬	8.0	8.0	8.0		化成
11 月中下旬	6.0		6.0		化成
12 月下旬	(6.0)		(6.0)		化成
計	30.0 (36.0)	24.0	30.0 (36.0)	2,000	

(注) () 内は1～4月どりの場合。

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5 (3) を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 追肥は遅れないようにし、最終の施肥は結球開始期とする。

(3) キャベツⅡ (レッドキャベツ)

1. 対象地域 浜松
2. 土 壌 粘質土 (黄色土)
3. 栽植本数 4,000 本/10 a
4. 目標収量 2,800 kg/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
年内どり		○△	◎										T-690
1～3月 どり		○△	◎										中生ルビーボール ネオルビー
春どり							△	◎					T-690
主要作業名		は種 床準備	は種 移植	● 定植準備・元肥	● 定植	追肥	収穫						

6. 施肥基準 (kg/10a)

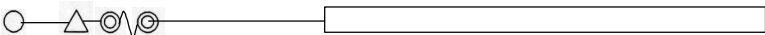
施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	定植前	25.0	21.0	13.0	3,000	緩効性
追 肥	10月上旬	6.0	4.0	5.0		化成
計		31.0	25.0	18.0	3,000	

7. 施用上の注意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 吸肥力が弱いので、土づくりを行い、保水、排水に心がける。

(4) メキャベツ（非結球タイプを含む）

1. 対象地域 小笠南部、浜松
2. 土 壌 粘質～砂質土（黄色土、灰色低地土、砂丘未熟土）
3. 栽植本数 1,200 ～1,500 本／10 a
4. 目標収量 1,000 kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
冬どり											T55-499 プチパール
主要作業名	播種	鉢上げ	● 元肥・定植	● 追肥	● 追肥	● えき芽下葉除去	● 追肥	● 収穫始め			収穫終り

6. 施肥基準 (kg／10a)

施肥時期			N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
黄色土・灰色低地土	元 肥	定植(8 月上旬)	11.0	11.0	11.0	3,000	緩効性
	追 肥	9 月上旬	6.0	4.0	5.0		化成
		9 月下旬	6.0	4.0	5.0		化成
		10 月下旬	6.0	4.0	5.0		化成
	計		29.0	23.0	26.0	3,000	
砂丘未熟土	元 肥	定植(8 月上旬)	12.0	12.0	12.0	3,000	緩効性
	追 肥	9 月上旬	8.0	5.0	7.0		化成
		9 月下旬	8.0	5.0	7.0		化成
		10 月下旬	8.0	5.0	7.0		化成
		11 月下旬	3.0	3.0	3.0		化成
	計		39.0	30.0	36.0	3,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 湿害に弱いので、堆肥を投入し、土づくりを行うとともに、排水対策を実施する。
- (4) 生育期間が長いので、元肥には緩効性肥料を使用し、追肥は数回に分けて施用する。

(5) ブロッコリー（頂花蕾どり）

1. 対象地域 三島、榛原南部、浜松
2. 土 壤 粘質～壤質土（黄色土、灰色低地土）
3. 栽植本数 5,000 ～6,000 本／10 a
4. 目標収量 1,200kg ／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	7	8	9	10	11	12	1	2	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
夏播き 年内どり									緑炎1号 あまぎ 直緑93号
夏播き 冬どり									
主要作業名		●	●	●					
	は種床準備	は種 移植	耕起・元肥 定植	追肥・中耕・土寄せ	追肥・中耕	収穫			

6. 施肥基準 (kg／10 a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	B ₂ O ₃	堆肥	施肥例
元肥	定植前	25.0	22.0	15.0	0.2	2,000	緩効性または有機配合 化成
追肥	定植後 15 日	6.0	4.0	6.0			
計		31.0	26.0	21.0	0.2	2,000	

(注) 夏播き年内どりの施肥基準。

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 有機配合や緩効性肥料を主体にし、追肥も適期に行い、肥切れをさせない。

(6) カリフラワー (はなやさい)

1. 対象地域 浜松
2. 土 壤 粘質土 (黄色土)
3. 栽植本数 3,500 (晩生) ~4,000 (早生) 本/10 a
4. 目標収量 2,500 kg/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
12月どり	○—△—●—————□										バロック
1月どり	○—△—●—————□										寒月
2月どり	○—△—●—————□										寒月
3月どり	○—△—●—————□										野崎F085
主要作業名			●	●	●						
		は 移 種 植	元 肥・ 定 植	追 肥	追 肥	収 穫					

6. 施肥基準 (kg/10 a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	B ₂ O ₃	堆肥	施肥例
元肥	定植前	18.0	16.0	13.0	0.1	3,000	緩効性
追肥	定植後 15 日	5.0	4.0	5.0			有機配合又は化成
	定植後 45 日	5.0	4.0	5.0			有機配合又は化成
計		28.0	24.0	18.0	0.1	3,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5 (3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 茎葉の生長と花蕾の発育が同時に進行するので、肥切れをさせないように追肥する。

(7) チ ン ゲ ン サ イ

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 砂質～粘質土
3. 栽植本数 33,000 ～36,000 本/10 a
4. 目標収量 2,000 ～3,000 kg/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
春どり		ハウス周年栽培(年間8～10作) 露地トンネル栽培は6～11月どり											夏あおい ニイハオ4号 ニイハオ114 青帝 ニイハオ・メイ
夏どり													
秋どり													
冬どり													
主要作業名		は種	● 元肥・定植	収穫		は種	● 元肥・定植		は種	● 元肥・定植		は種	● 元肥・定植

6. 施肥基準 (kg/10 a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	は種前	10.0	6.0	6.0	2,000	有機配合
計		10.0	6.0	6.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分(窒素、リン酸、カリ)に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、栽培前土壌の可給態リン酸含量が80～120mg/100gでは、リン酸施肥量を標準施肥の半量(50%減肥)とし、120mg/100gを超過した場合は、リン酸を無施肥(100%減肥)とする。交換性カリ含量が50～71mg/100gでは、カリ施肥量を標準施肥の半量(50%減肥)とし、71mg/100gを超過した場合はカリを無施肥(100%減肥)とする。
リン酸の減肥基準を適用する土壌は、赤色土、黄色土、褐色低地土、灰色低地土で、カリの減肥基準を適用する土壌は、陽イオン交換容量が15me/100g以上の赤色土、黄色土、褐色低地土、灰色低地土である。
- (3) 連作土壌では定期的に土壌診断を行い、その結果に応じ施肥を減らす。
- (4) 堆肥などの施用を行い、土づくりに心がける。
- (5) 夏期の施肥量は堆肥以外の全成分を20%減とする。

(8) タ ー サ イ

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 砂質～粘質土
3. 栽植本数 20,000～24,000 本／10 a
4. 目標収量 2,000kg (春、夏) ～2,400kg (秋、冬) ／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
春どり	ハウス周年栽培(年間6～7作)												緑彩二号
夏どり													
秋どり													
冬どり													
主要作業名	は種	元肥・定植	収穫	は種	定植	収穫	は種	元肥・定植	収穫	は種	定植	収穫	

6. 施肥基準 (kg／10 a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	定植前	12.0	10.0	10.0	1,000	
計		12.0	10.0	10.0	1,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分(窒素、リン酸、カリ)に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 連作土壌では定期的に土壌診断を行い、その結果に応じて施肥量を減らす。

(9) ミ ズ ナ

1. 対象地域 県下一円
 2. 土 壌 粘質～砂質土
 3. 栽植本数 3.5 ㎡ (は種量) / 10 a
 4. 目標収量 1,500kg/10 a
 5. 栽培型と主な作業

月旬	7	8	9	10	11	12	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
秋冬どり							千筋京水菜 京みぞれ
主要作業名		● 元肥	● は種	● 収穫			

6. 施肥基準 (kg/10 a)

施肥時期	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	12.0	12.0	12.0	2,000	有機配合又は化成
計	12.0	12.0	12.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5 (3)を参照。
- 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。

(10) コ マ ツ ナ

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 粘質～砂質土
3. 栽植本数 1.2～1.5^{リツ} (は種量) /10 a
4. 目標収量 1,000～2,000kg/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
春どり	△ ○—□												楽天 夏楽天
夏どり			△ ○—□										
秋どり						△ ○—□							
冬どり									△ ○—□				
主要作業名	● 耕起種 ・元肥	収穫		● 耕起種 ・元肥	収穫	● 耕起種 ・元肥		収穫	● 耕起種 ・元肥	収穫			

6. 施肥基準 (kg/10 a)

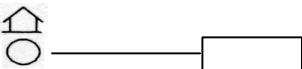
施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	は種前	15.0	8.0	10.0	2,000	有機配合又は化成
計		15.0	8.0	10.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分(窒素、リン酸、カリ)に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 連作土壌では定期的に土壌診断を行い、その結果に応じて施肥量を減らす。

(11) て ご ろ 菜

1. 対象地域 静岡市南部
2. 土 壌 砂丘未熟土
3. 栽植本数 42,000 本/10 a
4. 目標収量 2,000kg/10 a
5. 栽培型と主な作業

月 旬 栽 培 型	8	9	10	11	品 種
	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
秋どり					てごろ菜
主要作業名		● 耕 は 起 種 ・ 元 肥	収 穫		

6. 施肥基準 (kg/10 a)

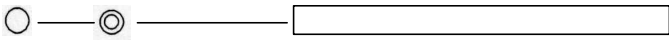
施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	は種前	15.0	15.0	15.0	2,000	有機配合又は化成
計		15.0	15.0	15.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5（3）を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。

(12) ナ バ ナ

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 粘質～砂質土
3. 栽植本数 2,800～3,000 本／10 a
4. 目標収量 1,300kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	8	9	10	11	12	1	2	3	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
秋冬どり									
主要作業名		は種	● 元肥・定植	● 追肥	● 収穫はじめ	● 追肥	● 追肥	● 追肥	

6. 施肥基準 (kg／10 a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	定植前	13.0	16.0	13.0	2,000	有機配合又は化成
追 肥	11月～2月 (5回)	16.0 (1回3.2)	10.0 (1回2)	14.0 (1回2.8)		
計		29.0	28.0	27.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。

(13) シ ャ ン ギ ク

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 粘質～砂質土
3. 栽植本数 1～1.5^{リットル} (は種量) / 10 a
4. 目標収量 秋冬どり 3,500kg / 10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
春どり	○	—	□							○	—	□	●	中葉種
秋どり						○	—	□	摘み取り収穫の場合					
冬どり						○	—	□	□					
							□	○	—	□	□		●	
主要作業名	● 元肥・は種	収 穫				● 元肥・は種		● 追 穫肥						

6. 施肥基準 (kg/10 a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	は種前	15	15	15	2,000	有機配合又は化成
追 肥		(5)	(5)	(5)		
計		15 (20)	15 (20)	15 (20)	2,000	

(注) () 内は秋冬どり

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分(窒素、リン酸、カリ)に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。

(14) 水 か け 菜

1. 対象地域 駿東（御殿場、小山）
2. 土 壤 壤質土（多質黒ボク土）
3. 栽植本数 1.5 畝（は種量）／10 a
4. 目標収量 1,500 kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	8	9	10	11	12	1	2	3	4	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
早どり (刈葉)		○	—							新湧水菜
普通 (摘葉)		○	—							在来
主 要 作 業 名		●			●	●				
		畝 づ く り 元 肥	は 種	水 か け 始 め (本葉4〜5枚)	追 肥	追 肥	収 穫 始 め			

6. 施肥基準 (kg／10 a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施肥例
元 肥	は種前	5.0	5.0	5.0	有機配合又は化成
追 肥	12月上旬	3.0	2.0	3.0	化成
	1月中旬	5.0			化成
計		13.0	7.0	8.0	

7. 施用上の留意事項

最終追肥は食味に影響するので、収穫1ヶ月前までに終える。

(15) ホ ウ レ ン ソ ウ

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壤 粘質～砂質土（黒ボク土、黄色土、灰色低地土、砂丘未熟土）
3. 栽植本数 3～5^{リットル}（は種量）／10 a
4. 目標収量 1,200kg（夏6,000束）～2,100kg（冬7,000束）／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
春どり	●									○			(春どり) 晩抽パルク オリオン サンライト
夏どり		○		○									(夏どり) おかめ アクティブ
秋どり				○									(秋どり) ソロモン アトラス リード
冬どり													パレード メガトン オーライ アトランタ
主要作業名	● 耕起・元肥	● は種 間引き（追肥）	● 収穫					● 耕起・元肥	● は種	● 間引き		● 収穫	

6. 施肥基準 (kg／10 a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	定植前	15.0	7.0	10.0	2,000	
追 肥	間引き後	(5.0)	(3.0)	(3.0)		
計		15.0 (20.0)	7.0 (10.0)	10.0 (13.0)	2,000	

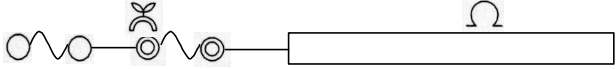
(注) () 内は冬・春どりの場合。

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 酸性に弱い作物であり、土壌酸度をpH6.5～7.0程度に調整する。
- (4) 前作の肥料が残っている場合は、施肥量を減じる。

(16) レタス I (秋 どり)

1. 対象地域 榛原南部、志太、小笠、浜松、森
2. 土 壌 粘質～壤質土（灰色低地土）
3. 栽植本数 5,500 ～6,000 本／10 a
4. 目標収量 2,500 kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	8	9	10	11	12	1	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
秋どり 露地栽培							しずか アスレ 菊川102号 菊川103号 ステディ モデナ ラプトル ツララ オータム 陽だまり 燦香
主要作業名	は 種	● 元 肥 ・ マル チ	定 植	収 穫 始 め		収 穫 終 わ り	

6. 施肥基準 (kg／10a)

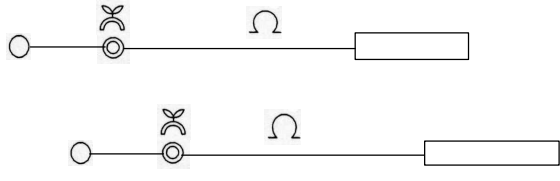
施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	定植前	20.0	13.0	18.0	2,000	有機配合又は化成
計		20.0	13.0	18.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5 (3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。

(17) レタスⅡ（冬どり）

1. 対象地域 榛原、志太、小笠、浜松、森
2. 土 壤 粘質～壤質土（灰色低地土）
3. 栽植本数 5,500 ～6,000 /10 a
4. 目標収量 3,000kg /10 a
5. 栽培型と主な作業

栽培型	月旬	8	9	10	11	12	1	2	3	4	品 種
		上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
冬どり トンネル栽培											菊川103号 菊川7号 ステディ Jプレス 逸香 オーディブル
主要作業名				●							
			は種	元肥・マルチ	定植	トンネル被覆	収穫				

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	定植前	26.0	16.0	25.0	2,000	有機配合又は化成
計		26.0	16.0	25.0	2,000	

7. 施用条の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5（3）を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。

(18) サニーレタス I (秋どり)

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壤 壤質～粘質土
3. 栽植本数 7,000 ～8,000 本/10 a
4. 目標収量 1,800 kg/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	8	9	10	11	12	1	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
秋どり							レッドファイヤー レッドウェーブ
主要作業名		は種 移植	● 元肥 定植 ・マルチ		収穫 トンネル被覆		

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥 定植前	23.0	18.0	17.0	2,000	化成
計	23.0	18.0	17.0	2,000	

7. 施用条の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。

(19) サニーレタスⅡ（冬どり）

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 壤質～粘質土
3. 栽植本数 7,000 本／10 a
4. 目標収量 1,500kg /10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	9	10	11	12	1	2	3	4	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
冬どり トンネル 栽 培									レッドファイヤー レッドウェーブ
主要作業名	は種	● 移植 元肥・ 定植 マルチ		トンネル被覆	収穫				

6. 施肥基準 (kg/10a)

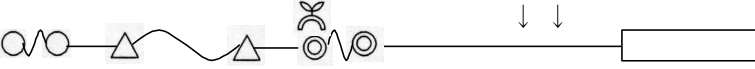
施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	定植前	29.0	24.0	23.0	2,000	化成又は有機配合
計		29.0	24.0	23.0	2,000	

7. 施用条の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部Ⅴ5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部Ⅴ6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。

(20) セルリー I (秋どり)

1. 対象地域 西部（浜松、浜北、湖西）
2. 土 壤 粘質～壤質土（黄色土、灰色低地土）
3. 栽植本数 3,700 本／10 a
4. 目標収量 5,000 kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	6	7	8	9	10	11	12	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
秋どり栽培								コーネル619
主要作業名	は 種 間 引 き	移 植	● 元 肥 ・ マ ル チ	● 敷 わ ら え き 芽 除 去 ・ 追 肥	● 追 肥 ジ ベ レ リ ン 処 理	収 穫 始 め		

6. 施肥基準 (kg／10 a)

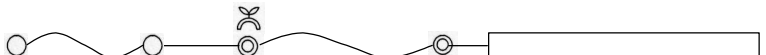
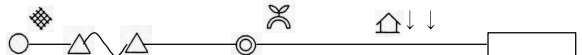
施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	B ₂ O ₃	堆肥	施肥例
元 肥	定植 30 日前					2,000	緩効性 有機配合又は化成 有機配合又は化成
	定植 7 日前	24.0	23.0	26.0	0.3		
追 肥	定植 25 日後	8.0	6.0	7.0			
	定植 50 日後	8.0	6.0	7.0			
計		40.0	35.0	40.0	0.3	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 他の作物に比較し施用量が多いので、土壌分析を行い、適切な施肥を行う。
- (4) 有機物の施用など、根がよく張り吸肥力の高まる土壌管理を行う。

(21) セルリーⅡ（冬どり）

- | | |
|-------------|-------------------|
| 1. 対象地域 | 浜松、浜北、湖西 |
| 2. 土 壌 | 粘質～壤質土（黄色土、灰色低地土） |
| 3. 栽植本数 | 4,300 本／10 a |
| 4. 目標収量 | 6,500 kg／10 a |
| 5. 栽培型と主な作業 | |

栽培型	6		7		8		9		10		11		12		1		2		3		4		品 種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下		
冬どり 栽 培																							コーネル619
代表作型																							
主 要 作 業 名	は種床準備		は種	寒冷紗被覆	移植	●	移植	定植準備・元肥	マルチ	定植	●	追肥	●	追肥	ジベレリン散布 ビニール被覆	収穫							

6. 施肥基準 (kg/10 a)

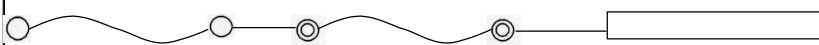
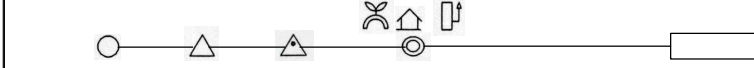
施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	B ₂ O ₃	堆肥	施肥例
元 肥	定植 30 日前					2, 000	緩効性
	定植 7~10 ㈬	24. 0	23. 0	26. 0	0. 3		
追 肥	定植 25 日後	8. 0	6. 0	7. 0			有機配合又は化成
	定植 50 日後	4. 0	3. 0	3. 5			有機配合又は化成
	定植 75 日後	4. 0	3. 0	3. 5			有機配合又は化成
計		40. 0	35. 0	40. 0	0. 3	2, 000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 他の作物に比較し施用量が多いので、土壌分析を行い、適切な施肥を行う。
- (4) 有機物の施用など、根がよく張り吸肥力の高まる土壌管理を行う。

(22) セルリーⅢ（春どり）

1. 対象地域 浜松、浜北、湖西
2. 土 壌 粘質～壤質土（灰色低地土）
3. 栽植本数 4,300 本／10 a
4. 目標収量 6,500 kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
春どり 栽 培											コーネル619
代表作型											
主要作業名	は種準備	は種間引き	移植	移植	● 元肥 定植 ・ マルチ	● 下張・えき芽除去	● 追肥	ジベレリン散布	収穫		

6. 施肥基準 (kg／10 a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	B ₂ O ₃	堆肥	施肥例
元 肥	定植前 7 日	24.0	18.0	21.0	0.1	2,000	緩効性
追 肥	定植後 30 日	8.0	6.0	7.0			有機配合又は化成
	定植後 50 日	8.0	6.0	7.0			有機配合又は化成
計		40.0	30.0	35.0	0.1	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第 2 部 V 5 (3) を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第 2 部 V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 連作の場合は特に、土壌診断等により残存養分を把握した上で元肥施用量を決める。

(23) パセリー（初夏まき）

1. 対象地域 西部（浜松、浜北）
2. 土 壤 粘質～壤質土（黄色土、灰色低地土）
3. 栽植本数 7,000 ～7,500 本／10 a
4. 目標収量 3,500kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
6月まき													選抜系
主要作業名	元肥	は種	間引き	間引き	間引き	間引き	追肥・土寄せ	下葉整理	収穫始め	追肥		追肥	

6. 施肥基準 (kg／10 a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	播種前	—	20.0	—	2,000	緩効性
追 肥	9月下旬	38.0	27.0	34.0		緩効性・有機配合 化成
	11月中旬	20.0	20.0	20.0		
	1月中旬	10.0	5.0	4.0		
計		68.0	72.0	58.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5 (3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 速効性肥料と肥効調節型肥料の組み合わせにより、慣行窒素施肥量 68kg の 30%削減が可能で、施肥回数も 1 回に削減できる。

＜施肥例＞

加磷硝安黄 3 号(13-10-11) : S70(スーパーロング 70 日、14-12-14) : S100(スーパーエコロング 100 日、14-12-14) =1 : 7 : 2 の割合で混合し、9月下旬から 10月上旬に施用する。

施肥量：窒素：リン酸：カリ＝48kg : 40kg : 47kg/10a

ただし、栽培地域の地温、作型に合った肥効調節型肥料を選ぶ必要がある。

(24) タ マ ネ ギ (早 生)

1. 対象地域 榛原、小笠南部、浜松南部
2. 土 壤 砂質土 (砂丘未熟土)
3. 栽植本数 26,000～28,000 本／10 a
4. 目標収量 4,000kg ／10 a

5. 栽培型と主な作業

月旬	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
秋まき 早だし栽培											篠原選抜系統 浜豊 竜珠 浜育
主要作業名	は種床消毒	は種床準備	本ぼ消毒	● 元肥・定植	● 追肥	● 追肥		収穫		収穫終わり	

6. 施肥基準 (kg／10 a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	B ₂ O ₃	堆肥	施肥例
元 肥	定植前	6.0	12.0	6.0	0.3	1,000	緩効性
追 肥	1 1月下旬	5.0	1.5	5.0			化成
	1 月上旬	5.0	1.5	5.0			化成
計		16.0	15.0	16.0	0.3	1,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5 (3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 酸性土壌に弱いので、土壌酸度をp H6.5～7.0に調整する。

(25) シロネギ I (中遠・西部)

1. 対象地域 中遠（磐田、竜洋、豊田、豊岡、御前崎）、西部（浜松）
2. 土 壤 壤質土（褐色低地土）
3. 栽植本数 30,000～40,000 本／10 a
4. 目標収量 3,500kg（普通栽培）／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬		3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	品 種
栽培型		上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
春まき	時期													夏扇秀逸
	主要作業名	苗床準備	は種		間引き	● 定植準備・元肥	● 施肥・中耕	● 施肥・土寄せ	土寄せ	収穫				
夏まき	時期													冬扇2号 龍翔 春扇
	主要作業名			苗床準備	は種	間引き	● 定植準備	● 元肥・定植	● 追肥	● 追肥・土寄せ	● 追肥・土寄せ	収穫		

6. 施肥基準 (kg／10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	定植前	8.0	12.0	8.0	1,000	緩効性
追 肥	9月下旬	4.0	4.0	4.0		有機配合
	10月上旬	4.0	4.0	4.0		有機配合
	10月下旬	4.0	4.0	4.0		有機配合
計		20.0	24.0	20.0	1,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 春まきの場合は施肥量を2割減じる。

(26) シロネギⅡ（愛鷹山麓）

1. 対象地域 愛鷹山麓
2. 土 壌 壤質土（黒ボク土）
3. 栽植本数 35,000 本／10 a
4. 目標収量 25,00 kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
秋まき 越年栽培	○							◎	◎	◎				越谷黒1本葱 東京夏黒2号
主要作業名	は種							● 元肥 定植		● 追肥	● 追肥	● 収穫始め		

6. 施肥基準 (kg／10 a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	5月上旬	13.0	21.0	13.0	2,000	緩行性 配合又は化成
追 肥	7月上旬	3.0		3.0		化成
	8月上旬	2.0		2.0		
計		18.0	21.0	18.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。

(27) ハ ネ ギ

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 砂土～壤質土
3. 栽植本数 畦幅 90 c m、条間 2 0 c m の条まき
4. 目標収量 2, 500kg / 10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
露 地 (直播)			○						○				九条細ネギ 静岡早生細ネギ やっこ葱 小夏 小春 わかさま 雷山 雷王 夏葱 2 号
ハウス (直播)	△						△			△			
主要作業名	● 元肥 は種 (冬まき)		● 追肥 (冬まき)	○ 収穫 (冬まき)									

6. 施肥基準 (kg/10 a)

施肥時期	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	14.0	7.0	7.0	2,000	配合又は化成 化成
追 肥	6.0	3.0	3.0		
計	20.0	10.0	10.0	2,000	

7. 施用条の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第 2 部 V 5 (3) を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第 2 部 V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 夏まきの場合は、施肥量を 2 ～ 3 割減じる。
- (4) 連作土壌では土壌分析を実施し、塩類集積にならないように施肥を行う。
- (5) p H が低いと生育不良になるので、土壌酸度を p H 6.0 ～ 6.5 に調整する。

(28) ラッキョウ (エシャレット)

1. 対象地域 浜松南部
2. 土 壌 砂質土 (砂丘未熟土)
3. 栽植本数 17,000 球/10 a
4. 目標収量 1,000kg /10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
早だし	□▽□		◎									らくだ 在来
冬～春だし	□▽□		◎									
主要作業名	種球掘り上げ	種球乾燥貯蔵	● 種球調整	● 定植 中耕・除草	● 補植・追肥・土寄せ(早出し)	● 追肥(冬～春出し)	● 追肥(冬～春出し)	● 追肥(冬～春出し)	● 土寄せ・収穫始め(早出し)	● 追肥(冬～春出し)	● 追肥(冬～春出し)	

6. 施肥基準 (kg/10 a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	植付け前 植付け時	22.0	19.0	20.0	2,000	緩効性
追 肥	9月下旬	4.0	4.0	4.0		配合又は化成
	10月上旬	4.0	4.0	4.0		配合又は化成
計		30.0	27.0	28.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分(窒素、リン酸、カリ)に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。

(29) シ ソ

1. 対象地域 県下一円
 2. 土 壌 壤土～砂壤土
 3. 栽植本数 2,700 ～3,000 本/10 a
 4. 目標収量 2,000 ～2,500 kg/10 a
 5. 栽培型と主な作業

月旬	3	4	5	6	7	8	9	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
直播								芳香赤しそ
主要作業名	● 直まき栽培元肥			● 収穫	● 追肥	● 追肥		
	は種		間引き		収穫（2回以降は1週間おき）	追肥		

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	は種10日前 移植10日前	18.0	18.0	18.0	2,000	緩効性
追 肥	6 月旬(刈取後)	4.0	2.0	3.0		化成
	7 月旬(刈取後)	4.0	2.0	3.0		化成
	8 月旬(刈取後)	4.0	2.0	3.0		化成
計		30.0	24.0	27.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
 (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。

(30) モロヘイヤ

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 粘質～砂質土
3. 栽植本数 6,000～8,000 本／10 a
4. 目標収量 半促成栽培 2,000kg／10 a
促成栽培 3,500kg／10 a

5. 栽培型と主な作業

月旬		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	品 種
栽培型		上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
半促成	時期													
	主要作業名			は種	元肥・定植	収穫	追肥	追肥	追肥	追肥	追肥			
促成	時期													
	主要作業名	追肥	追肥	追肥	追肥	追肥	追肥		は種	元肥・定植	収穫	追肥	追肥	

6. 施肥基準 (kg／10 a)

半促成栽培

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	定植前	10.0	8.0	8.0	3,000	有機配合又は化成
追 肥	月 1 回	10.0 (1 回 2.0)	5.0 (1 回 1.0)	5.0 (1 回 1.0)		液肥
計		20.0	13.0	13.0	3,000	

促成栽培

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	定植前	10.0	8.0	8.0	3,000	有機配合又は化成
追 肥	月 1 回	25.0 (1 回 2～3)	13.0 (1 回 1～2)	13.0 (1 回 1～2)		液肥
計		35.0	21.0	21.0	3,000	

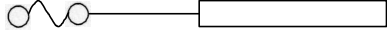
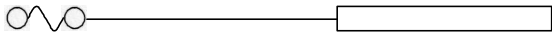
7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第 2 部 V 5 (3) を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第 2 部 V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。

3 根 菜 類

(1) ダイコン I (秋 冬)

1. 対象地域 西富士、箱根山麓、浜松、湖西
2. 土 壌 粘質～壤質土（黒ボク土、黄色土）
3. 栽植本数 7,000 ～8,000 本／10 a
4. 目標収量 6,000kg（火山灰）～8,000kg（洪積）／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬 栽培型	7 上中下	8 上中下	9 上中下	10 上中下	11 上中下	12 上中下	1 上中下	2 上中下	3 上中下	品 種
高冷地										耐病総太り YRくらま
年内どり										役者横町 T734 冬自慢
1～3月どり										耐病総太り 青さかり
主要作業名 (年内どり)		●	●							青誉 冬得
		耕起・ 元肥・ 整地	間引き 間引き 追肥・ 中耕・ 土寄せ		収穫					

6. 施肥基準 (kg／10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	B ₂ O ₃	堆肥	施肥例
元 肥	は種前 (8 肝～9 肝)	12.0 (16.0)	20.0 (16.0)	12.0 (16.0)	0.3	1,000	有機配合又は化成
追 肥	10 月上旬	4.0		4.0			化成
	11 月上旬	(3.0)		(3.0)			化成
	12 月上旬	(3.0)		(3.0)			化成
	1 月中旬	(3.0)		(3.0)			化成
計		16.0 (29.0)	20.0 (16.0)	16.0 (29.0)	0.3	1,000	

(注) () 内は西部地域 1～3 月どり。

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第 2 部 V 5 (3) を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第 2 部 V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 堆肥は完熟したものを少なくとも 20 日前までにすき込む。

(2) ダイコンⅡ（冬春）

1. 対象地域 榛原、小笠南部
2. 土 壤 砂質土（砂丘未熟土）
3. 栽植本数 8,000 ～10,000 本／10 a
4. 目標収量 8,000kg ／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
年内どり		○	—————		—————						耐病総太り
1～2月どり		○	—————		—————						青さかり
2～3月どり			○	—————				—————			冬自慢
4～5月どり						✂	Ω			—————	青誉
						○					ハイナン3号
											冬みねセブン
主要作業名	深耕・土壌消毒	● 整地・元肥	● は種 間引き	● 追肥 間引き	● 追肥 追肥・土寄せ	● 追肥	● 追肥		収穫		はるしん大根

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	B ₂ O ₃	堆肥	施肥例
元 肥	は種時 (9 月上旬)	6.0	7.0 (8.0)	7.0	(0.3)	1,000	有機配合または 化成 熔リン又は重焼 リン
追 肥	10 月中旬	6.0	3.0	5.0			化成
	11 月中旬	6.0	3.0	5.0			化成
	12 月上旬	8.0	5.0	7.0			化成
	1 月上旬	8.0	6.0	8.0			化成
計		34.0	32.0	32.0		1,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部Ⅴ5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部Ⅴ6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 堆肥は完熟したものを少なくとも20日前までにすき込む。

(3) カ ブ

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 粘質～砂質土（黒ボク土、黄色土、灰色低地土、砂丘未熟土）
3. 栽植本数 0.6 1 （は種量）／10 a
4. 目標収量 800kg（夏 4,000 束）～2,400kg（冬 6,000 束）／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
春どり	○	□										○	耐病ひかり
夏どり		○	□	○	□								白鷹
秋どり					○	□							
トンネル 冬春どり						○	□	○	□	○	□	○	
ハウス 冬春どり							○	□	○	□	○	□	
主 要 作 業 名	● 耕 起・元肥	● 春 間 引 き	● 春 どり 収 穫				● 耕 起・元肥	● 冬 春 どり は 種	● 間 引 き・追 肥	● 冬 春 どり 収 穫			

6. 施肥基準 (kg/10a)

夏どり（6～8月まき）

施 肥 時 期	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥 定植前	4.0	4.0	4.0	1,000	有機配合又は化成
計	4.0	4.0	4.0	1,000	

春どり（4～5月まき）、秋どり（9月まき）、冬春どり

施 肥 時 期	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥 定植前	15.0	10.0	15.0	1,000	
追 肥 間引き後	(5.0)	(5.0)	(5.0)		
計	15.0 (20.0)	10.0 (15.0)	15.0 (20.0)	1,000	

(注) () 内は冬・春どりの場合。

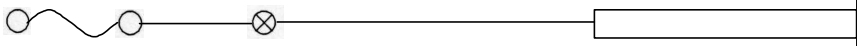
ハウス栽培のトータル窒素成分量は、春・秋どり 10 kg、冬春どり 15kg とする。

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 前作の肥料が残っている場合は施肥量を減じる。

(4) ゴボウ

1. 対象地域 三島
2. 土 壌 壤質土（黒ボク土）
3. 栽植本数 8,000 ～10,000 本／10a
4. 目標収量 1,500kg ／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	4	5	6	7	8	9	10	11	12	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
春まき										山田早生 みとよ白肌
主要作業名		● 元肥種	● 追肥・土寄せ・間引き				収穫始め		収穫終わり	

6. 施肥基準 (kg／10a)

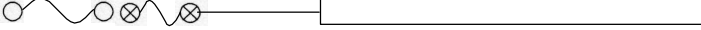
施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	畝立て時	7.0	11.0	7.0	1,000	有機配合又は化成 化成
追 肥	6月下旬	6.0		6.0		
計		13.0	11.0	13.0	1,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 堆肥は1ヶ月前にすき込み、深く耕す。
- (4) 根に直接肥料が触れると岐根になるので、施肥量と位置には注意する。

(5) ニンジン I (冬どり)

1. 対象地域 三島市
2. 土 壤 壤質土 (黒ボク土)
3. 栽植本数 35,000 ~40,000 本/10 a
4. 目標収量 2,500kg /10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
冬どり												向陽2号 はまべに
主要作業名		● 元 肥 種	● 間 引 き	● 間 引 き・追肥・土寄せ		● 収 穫						

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	は種前	8.0	15.0	10.0	2,000	化成
追 肥	8月下旬	8.0		8.0		化成
計		16.0	15.0	18.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分 (窒素、リン酸、カリ) に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 窒素肥料の過多は過繁茂の原因になるので、適正量を守り、肥大着色期に肥料が効きすぎないようにする。

(6) ニンジンⅡ（トンネル、春どり）

1. 対象地域 小笠南部（大東、大須賀、浜岡）
2. 土 壌 砂質土（砂丘未熟土）
3. 栽植本数 30,000 本／10 a
4. 目標収量 5,000kg ／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	11	12	1	2	3	4	5	6	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
トンネル 春どり									ペーターリッチ
主要作業名	元肥	は種	トンネル被覆	間引き・追肥	換気始め	土寄せ	トンネル除去	収穫始め	収穫終わり

6. 施肥基準 (kg／10a)

施 肥 時 期	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	10.0	22.0	10.0	2,000	緩効性
追 肥	5.0	5.0	5.0		化成
計	15.0	27.0	15.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5（3）を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 追肥は根長が決まる本葉6枚頃までに施用を終える。
- (4) 収穫時に肥料が残っていると、二次生長や裂根の原因となるので、収穫時まで窒素肥料が残らない管理をする。

(7) レンコン

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 壤質～粘質土（灰色低地土）
3. 栽植本数 300 ～400 本／10a
4. 目標収量 2,000kg ／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
普通栽培	◎												支那白花種
													備中種
主要作業名	●	●											
	元肥・植付け	灌水・漏水防止	追肥 地下茎直し	灌水・漏水防止	地上部切断（収穫十日前）	収穫始め							

6. 施肥基準 (kg／10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施肥例
元 肥	植付け後 (1 週間後)	20.0	24.0	20.0	緩効性
追 肥	6 月下旬	12.0		12.0	化成
計		32.0	24.0	32.0	

(8) バレイショ I (早掘)

1. 対象地域 小笠、榛原南部
2. 土 壤 砂質土 (砂丘未熟土)
3. 栽植本数 6,000 株/10 a
4. 目標収量 1,500 kg/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	12	1	2	3	4	5	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
トンネル マルチ栽培							メイクイン 男 爵
主要作業名		● 施肥・定植 マルチ ビニルトンネル				収穫	

6. 施肥基準 (kg/10a)

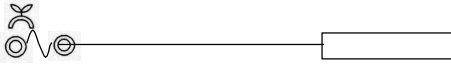
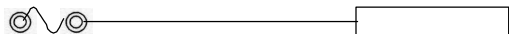
施 肥 時 期	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥 定植時	20.0	20.0	20.0	1,000	化成又は配合
計	20.0	20.0	20.0	1,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5 (3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 生育初期に肥料を効かせ、必要な葉をすみやかに展開させる。

(9) バレイシヨⅡ

1. 対象地域 三島、小笠、浜北、浜松、湖西
2. 土 壌 粘質土（黒ボク土、灰色低地土、黄色土）
3. 栽植本数 4,000 ～6,000 株／10a
4. 目標収量 2,500kg ／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
春 作 マルチ											男 爵 マークイン
露 地											
秋 作											
主 要 作 業 名	●							●			デジマ
	耕起・元肥・畝作り・定植・マルチ	マルチ	芽かき	収穫				耕起・畝作り・元肥・定植	中耕・土寄せ	収穫	

6. 施肥基準 (kg／10a)

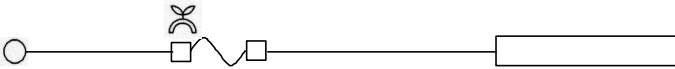
施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	定植時	18.0	26.0	20.0	1,000	化成、配合
計		18.0	26.0	20.0	1,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 二次生長をさけるために、窒素過多には注意する。

(10) カンショ I (早掘)

1. 対象地域 浜松南部
2. 土 壌 砂質土 (砂丘未熟土)
3. 栽植本数 4,000 本/10 a
4. 目標収量 2,000 kg/10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	2	3	4	5	6	7	8	9	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
早掘 マルチ栽培									紅高系 ベニアズマ 紅はるか
主要作業名	種芋消毒・伏せ込み		● 施肥・畝立・マルチ			収穫始め	収穫終わり		
	苗床準備								

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥 定植前	4.0	10.0	10.0	1,000	化成又は有機配合
計	4.0	10.0	10.0	1,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 窒素が多いとつるぼけしやすい。
- (4) 元肥中心として、不足するときは植え付け後60日頃に窒素成分で1～2kg/10aを施す。

(11) カ シ ヨ II

- | | |
|-------------|------------------------------|
| 1. 対象地域 | 沼津、駿東、小笠南部、磐田南部、浜北 |
| 2. 土 壌 | 粘質～砂質土（黒ボク土、黄色土、灰色低地土、砂丘未熟土） |
| 3. 栽植本数 | 4,000 本／10a |
| 4. 目標収量 | 3,000kg ／10 a |
| 5. 栽培型と主な作業 | |

栽培型	月旬	3	4	5	6	7	8	9	10	11	品 種
	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
食 用											紅高系 ベニアズマ 紅はるか
加工用 (芋切干)											泉13号 紅はるか
主 要 作 業 名				●		●					
				元肥・畝立・採苗		追肥		収穫			

6. 施肥基準 (kg/10a)

施 肥 時 期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	畝立て時	4.0	8.0	10.0	1,000	化成又は有機配合
追 肥		2.0	4.0	5.0		
計		6.0	12.0	15.0	1,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5（3）を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 窒素が多いとつるぼけしやすい。

(12) サ ト イ モ I

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 粘質～砂質土（黒ボク土、黄色土、灰色低地土、砂丘未熟土）
3. 栽植本数 4,000 株／10 a
4. 目標収量 1,500kg ～2,000kg ／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	3	4	5	6	7	8	9	10	11	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
早堀栽培	○	○								石川早生 セレベス（赤芽） 在来品種
普通堀栽 （平地）		○								
普通堀栽培 （高冷地）			○							
主要作業名	催芽	元肥	追肥・土寄せ	追肥・土寄せ			収穫			

6. 施肥基準 (kg／10a)

施 肥 時 期			N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
平地	元 肥	定植前	18.0	17.0	15.0	1,000	化成
	追 肥	第1回	6.0	6.0	6.0		化成
		第2回	6.0	6.0	6.0		化成
計			30.0	29.0	27.0	1,000	

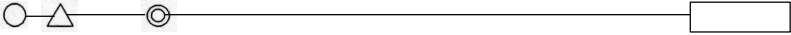
施 肥 時 期			N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
高冷地	元 肥	定植前	8.0	17.0	15.0	1,000	化成
	追 肥	第1回	7.0	10.0	8.0		化成
		第2回	6.0	6.0	6.0		化成
計			21.0	33.0	29.0	1,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。窒素成分量に留意し、その分施肥量を減らす。
- (3) 元肥の窒素、カリが多すぎると、初期生育が不良になるので、注意する。

(13) サトイモⅡ（エビイモ）

1. 対象地域 中遠（磐田地域）
2. 土 壌 壤質土（褐色低地土）
3. 栽植本数 900 ～1,000 株／10 a
4. 目標収量 1,800k～2,000 kg ／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	3	4	5	6	7	8	9	10	11	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
										海老芋 白茎海老芋
主要作業名		● 元肥 鉢上げ	● 元肥 定植	● 追肥 ・土寄せ	● 追肥 ・土寄せ	● 追肥 ・土寄せ	● 追肥 ・土寄せ			

6. 施肥基準 (kg／10a)

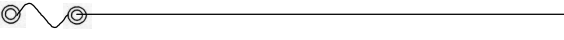
施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	定植前(60%) 定植時(40%)	12.0	14.0	12.0	1,000	緩効性
追 肥	6月上旬	5.0	3.0	5.0		化成又は有機配合
	6月下旬	5.0	3.0	5.0		化成又は有機配合
	7月中旬	5.0	3.0	5.0		化成又は有機配合
	8月上旬	5.0	3.0	5.0		化成又は有機配合
計		32.0	26.0	32.0	1,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部Ⅴ5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部Ⅴ6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。窒素成分量に留意し、その分施肥量を減らす。
- (3) 完熟堆肥と苦土石灰は定植2週間前に施し、土とよくなじませておく。

(14) ヤマイモ

1. 対象地域 愛鷹山麓
2. 土 壌 壤質土（黒ボク土）
3. 栽植本数 7,000 ～8,000 株／10 a
4. 目標収量 2,500 kg／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
露 地													長泉系 デブ系
主 要 作 業 名	● 元 肥	● 定 植	● 追 肥	● 土 寄 せ ・ 敷 わ ら	● 追 肥				収 穫				

6. 施肥基準 (kg／10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	3月中旬	17.0	10.0		2,000	緩効性
追 肥	定植後 15 日	18.0	18.0	18.0		緩効性
	7月上旬	3.0	3.0	3.0		化成
計		38.0	31.0	21.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5（3）を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。窒素成分量に留意し、その分施肥量を減らす。
- (3) 堆肥などの有機物を施し、土壌改良に努める。

(15) ショウガ I (根ショウガ)

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壤 粘質土～砂質土（黒ボク土、灰色低地土、砂丘未熟土）
3. 栽植本数 6,500 ～9,000 株／10 a
4. 目標収量 2,500kg （普通栽培）／10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
半促成栽培			↑ ◎	—————									中ショウガ 三州 摂津
早熟栽培			↑ ◎	—————									
普通栽培				◎◎	—————								
主要作業名 (普通栽培)				● 元肥	定植	追肥・中耕・土寄せ			収穫始め			収穫終り	

6. 施肥基準 (kg／10a)

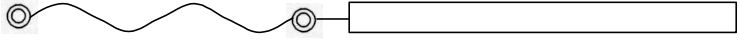
施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	定植前	20.0	15.0	15.0	2,000	配合又は化成 化成
追 肥	5月下旬	5.0	5.0	5.0		
計		25.0	20.0	20.0	2,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V 5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V 6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 浅根性で根量が少ない特性を持つので、完熟堆肥を施し、土づくりを行う。

(16) ショウガⅡ（葉ショウガ）

1. 対象地域 中部
2. 土 壌 砂質土
3. 栽植本数 30,000 株／10 a
4. 目標収量 6,000kg /10 a
5. 栽培型と主な作業

月旬	12	1	2	3	4	5	6	7	品 種
栽培型	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	
促成栽培									三州 在来
主要作業名		● 元肥	● 追肥	● 追肥	● 追肥				

6. 施肥基準 (kg/10a)

施肥時期		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	堆肥	施肥例
元 肥	定植前	15.0	15.0	15.0	5,000	緩効性
追 肥	2月中旬	7.0	7.0	7.0		有機配合
	3月中旬	7.0	7.0	7.0		有機配合
	4月中旬	7.0	7.0	7.0		有機配合
計		36.0	36.0	36.0	5,000	

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6 土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 浅根性で根量が少ない特性を持つので、完熟堆肥を施し、土づくりを行う。
- (4) 静岡市南部海岸地域ではイエバエ対策肥料を施用する。

4 その他

(1) タケノコ

1. 対象地域 県下一円
2. 土 壌 粘質土～壤質土
3. 栽植本数 親竹本数 150～200 本
4. 目標収量 1,500kg /10 a
5. 栽培型と主な作業 (kg/10 a)

月旬	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	品 種
栽培型	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	
主要作業名	● 施肥			● 親竹設置	● 追肥		● 追肥		● 追肥		敷草・マルチ	乾燥時かん水	

6. 施肥基準

施肥時期	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	SiO ₂	堆肥
5 月中旬	9.0	4.0	6.0	30.0	1,000～2,000kg/10 a
7 月中旬	6.0	3.0	5.0		
9 月中旬	8.0	4.0	7.0		
1 月下旬	10.0	4.0	6.0		
計	33.0	15.0	24.0	30.0	1,000～2,000kg/10 a

7. 施用上の留意事項

- (1) 肥料の施用量は使用する堆肥の肥料成分（窒素、リン酸、カリ）に留意し、その分施肥量を削減する。堆肥の肥料成分を考慮した施肥量の削減方法は第2部V5(3)を参照。
- (2) 土壌分析を行い、改善基準値の上限を超えて含有している成分は施肥量を減らす施肥設計を立てる。施肥量の削減方法は第2部V6土壌診断を活用した適正施肥を参照。
- (3) 施肥は当年度のタケノコ生産だけでなく、親竹の肥育成もする。
- (4) 1 月中下旬の施肥は寒乾時に当たるので出芽促進のため速効性肥料が望ましい。
- (5) 乾燥時の施肥は、降雨後に行うか、または施肥後にかん水をする。

